全美協・メールマガジン
zenbikyou mail magazine
全国大学造形美術教育教員養成会議メールマガジン　2018.12 月 1 日 第 15 号　（毎月 1 日発行）

日本とフィンランドの交流展を通した北方圏地域人材育成の取り組み

尾澤　勇
秋田公立美術大学

1. 日本とフィンランドの交流展開催の経緯とその意義

2014 年度より、フィンランドと秋田県の中学校・高等学校の造形教育交流展を両国で開催してきた。交流深化の過程で、自然環境や風土、文化面、造形面など共通性と相違点について生徒自身が気づき、それぞれの郷土文化のよさや美しさについて実感を伴って捉えていることが造形活動や言語活動を通してわかった。交流展事業を契機に、同じ北方圏に属する、東北・北海道と北欧諸国との造形教育交流と比較を通して、風土や気候、生態系などから両国の児童・生徒に共通する気質や違いなどを調査し、北方圏（寒冷地）の故郷を大切にしながら、地域で生きていく人材の育成について、北方圏ならではの資質・能力を浮き彫りにしたい。さらにその育成方法、教育内容や制度設計などについて学際的な研究者と共に提言できたらと考えた。そして科研費を申請し平成 30～32 年度「基盤研究 C　研究課題名：北方圏の風土を生かした資質・能力育成の基盤研究：北欧との造形教育交流と比較から」の研究に発展した。

2013 年には、フィンランド共和国の中・高等学校、放課後のアクティビティーのための美術学校、大学などの視察を行った。その中で、「エスポー市立サールニラークソ中学校（基礎教育学校の 7～９年生）」ヨウニ・クピアイネン（視覚美術科・情報科）教諭が日本の文化に興味を抱き、日本の中学校との造形教育との交流の希望していることを知り、尾澤 勇と宮澤豊宏 氏（通訳）が仲介し、2014 年度 4 月に「エスポー市立サールニラークソ中学校」ヨウニ・クピアイネン教諭と「秋田県大仙市立西仙北中学校」田中真二朗（美術科教諭）とを結び、両校の造形教育による交流実践が始まった。

2015 年度　秋田での「美術の時間」展のポスター

2015 年度　サールニラークソ中学校の作品を見つめる生徒

2016 年度「美術の時間」展に向けての協議　クピアイネン教諭と田中教諭

かねてより、秋田県大仙市立西仙北中学校の田中真二朗教諭が、美術の時間の学びの姿をそのまま、地域や保護者などに対して見える展覧会である「美術の時間」展を行っていた。それをフィンランドとの交流展に発展させた。

2015 年度は、『「美術の時間」展』（交流展）を 2015 年 11 月 3 日～12 月まで、秋田公立美術大学アトリエももさだ及び西仙北中学校）にて開催した。

2016 年度の『「美術の時間」展』を開催するにあたり、クピアイネン教諭と確認事項を取り決めた。

双方の生徒が、「学校生活」を紹介するメディアの表現を行い交流することを通して異文化理解を進める。その結果、生活スタイルや学校生活の違いを認識し、お互いに自国文化や身近な生活を見つめ直すきっかけとなり、意味を発見し学びを深めることを目的とする。

１．西仙北中学校は、２学年を対象とする。サールニラークソ中学校は、２学年美術選択生徒及び１学年生徒を対象とする。

２．「学校生活」を共通テーマに相手国の生徒に伝えることを意識して表現を行う。文字や音声等の説明には英語を使用させたい。

３．表現方法は、アニメーション表現（ストップモーション・ピクシレーション・クレイアニメーションなど）及び漫画表現とする。

４．題材の取り組み時数は、今後協議して決める。

この後、両国の中学校による『「美術の時間」展』（交流展）を、2016 年度（フィンランド共和国エスポー市）で開催することができた。

2016 年度　エスポー市での「美術の時間」展のポスター

サールニラークソ中の自然をモチーフにした陶芸作品、西仙北中の自然や風土、行事をモチーフにした和菓子などの作品

2016 年度　エスポー市での「美術の時間」展を鑑賞する生徒

サールニラークソ中学校の自分の内面や社会との関係性を考えて制作したコラージュ作品

両国の生徒作品は、学校生活をテーマにしたが、フィンランド側は、学校生活出身近なキノコや樹木などの地域の自然を題材とした陶芸作品、自分の内面や社会との関係性を考えて製作したコラージュ作品など、西仙北中は、西仙北の自然や行事、風土などを題材とした和菓子などの作品が並び、調和のとれた交流展示内容となった。

２．2017、2018 年の日本とフィンランドの高等学校の「美術の時間」展の実際

中学校の交流展の実践を踏まえ高等学校の交流につなげる意味で、フィンランド側では、「エスポー市立サールニラークソ中学校」のヨウニ・クピアイネン教諭がエスポー市立内の高等学校の教諭に日本の高等学校との交流する意思を打診した。日本側では、「秋田県大仙市立西仙北中学校」の田中真二朗教諭と「美術の時間」展を共同で行っていた「秋田県立西目高等学校」の黒木健教諭に協力を促した。

2016 年度からは、「エスポー市立クニンカーンティエ高等学校」ニナ・ルオマ（視覚美術）教諭(2017 年 8 月よりエスポー市立カイター中・高等学校に移動)と「秋田県立西目高等学校」黒木 健 芸術科（美術）教諭との交流が始まり、2017 年 12 月に両国の高等学校の『「美術の時間」展 2017』（交流展）第Ⅰ期をフィンランド共和国エスポー市立カイター中・高等学校で、第Ⅱ期としてエスポーの中心部にあるカイヴォメスタリ・ギャラリーで 2018 年 1 月 8 日から 29 日に開催した。

展覧会の企画では、2016 年 12 月 8 日に秋田県立西目高等学校の黒木健（芸術科 美術教諭）が訪問し、ニナ・ルオマ（美術科教諭）と 2017 年度の展覧会内容のついて十分な話合いがもたれた。次の３項目を柱として授業交流を行っていくことを確認した。

１.身近な自然をテーマとしたもの（山林や海辺の自然など）

2.伝承文化等をテーマとしたもの（フィンランドにおける「カレワラ」や「ムーミン」、日本における「ナマハゲ」や「妖怪」など）、
3.アニメーション題材によるもの（日本伝統の漫画の表現方法の変遷や、アニメーション化の技術的課題の解決方法など）

秋田県立西目高等学校では、英語科教諭の協力を得て、インターネットの無料通話サービスなどを活用して、両校の生徒が自分たちの作品を紹介し合うことを通して表現や解釈の差異などを感じ取り、多様なものの見方や感じ方について実感を伴って会得してきた。同一のテーマをもって両校の生徒が取り組んできた、精霊や妖怪の表現の違いについて両国の生徒の表現の違いが目を引いた。カイター中・高等学校の展覧会開始後、カイター高等学校生徒が展示ケースの前に集まってきて、黒木教諭に質問をぶつけている姿が印象的であった。日本のアニメに関心のある生徒も多く、日本のアニメから日本語を勉強した生徒の流暢な日本語に感心した。この展覧会へ向けて両国の生徒や教員同士の協力関係や文化理解が深まった。展覧会会場は カイター中・高等学校とカイヴォメスタリ・ギャラリーである。カイター中・高等学校の生徒、教職員をはじめとして、カイヴォメスタリ・ギャラリーは市営温水プールの入口でもあるため市営温水プール利用者（1 日あたり約 1000 人）など多くの一般の拝観者にも啓発することができた。

カイター中・高等学校の開会式では、副校長のユハ・ルュオツライネン先生のご臨席の下、盛大に催された。エスポー市訪問時は、フィンランド共和国独立 100 周年記念日を挟んでいたため、カイター中・高等学校での独立記念日行事にも参加した。独立記念行事は全て生徒が主体的につくりあげていた姿を見て、主体的・共同的で深い学びを実現していることを見取ることができた。カイター中・高等学校の美術の授業にも黒木健教諭がゲストティーチャーとして授業を行った。これからの交流拡大校である、エスポー市立タピオラ高等学校にも訪問し、日本からの留学生を交え、タピオラ高校の生徒がタピオラ高等学校の教育実践についてプレゼンテーションを受けた。授業視察などを通して、生徒が主体的に学ぶ姿から、日本の美術科教育に生かす示唆を多く得た。

2017 年度　エスポー市での高校による「美術の時間」展ポスター

カイター中・高等学校の生徒の質問に答える黒木健教諭

カイター中・高等学校の「美術の時間」展開会式

日本の妖怪モチーフ制作と立体ループアニメーションの作品展示

フィンランドの妖怪の立体作品

我が国とフィンランドの新学習指導要領の資質・能力の育成については、同じ方向性を持って改革が進んでいる。我が国では、「次世代の学校・地域」創生をはかるためにも「社会に開かれた教育課程」を実現することが重視されている。また、フィンランドでは、「教育が創造性と文化的多様性を尊重することを強化し、同文化間と異文化間の相互作用を促進し、その結果、文化的に持続性のある発展の基礎を築く。」ことなどが示されている。フィンランドと秋田の造形を主体とした交流学習を通して、これからの世界をつくる生徒の資質・能力を育むことにつながることを強く意識して実践した。

３．まとめと今後の課題

2017 年の展覧会を受けて、2018 年度は、2018 年 10 月 16 日～31 日（Ⅰ期）：秋田公立美術大学サテライトセンター（フォンテ AKITA 6 階）にて「美術の時間」展-フィンランドと日本　高等学校による交流展 2018-を開催した。2018 年 11 月 20～25 日（Ⅱ期）：西目公民館シーガルを開催した。この展覧会は、2017 年にフィンランド共和国エスポー市で開催した展覧会をブラッシュアップし、共同テーマである「日本とフィンランドの神話における精霊」に真摯に取り組んだ展覧会である。

2018 年度　秋美大サテライトセンターの「美術の時間」展　Ⅰ期ポスター

フィンランドの神話の精霊を表現したパステル画と精霊を表現した紙のレリーフ作品

2018 年度　西目公民館シーガルの「美術の時間」展Ⅱ期を鑑賞する生徒

交流研究実践課程の中で浮き彫りとなった事項が大きく２点ある。１つ目は、実践に参加した主要教員の地位の問題である。フィンランドの学校では、基本的には希望しないかぎりは学校間の移動は少ない。それに対して日本の公立学校は教員の移動があり、移動に伴い、フィンランドの学校と日本の交流当該校の交流が先細りになってしまう懸念が存在する。２点目は、両国の教員同士の交流というボトムアップ的な交流事業を行ってきたが、交流に伴う旅費、展覧会費用などは野村財団の芸術文化に関する補助金や教員側の申請によるフィンランド教育庁の補助金に頼る交流であった。交流事業を自治体レベルに格上げし、予算面や広報面での行政のバックアップをしてもらう体制をつくっていかないと当該交流教諭や尾澤の負担ばかりが増してしまい、継続的な交流につながらない懸念が存在する。

今後、児童・生徒・学生のホームスティなど直接的な交流につなげるためには行政にどのように働きかけ、行政レベルでの交流につなげられるのかが鍵であると考えている。

2018 年度より、北秋田市が所管する秋田フィンランド協会も本格的に活動を再開したことも追い風である。2018 年度の交流展で後援を受けた日本フィンランドデザイン協会などフィンランド関係の交流団体、行政などに積極的に働きかけていきたいと考えている。

交流展と科研費研究についてのこれからは、秋田公立美術大学附属高等学院とフィンランド共和国オムニア職業学校（フィンランドにおける職業高校的な位置付けの学校）との交流を模索している状況である。

科研費研究では、2018 年 12 月に、フィンランド共和国を学際的な研究者チームが訪問し、2019 年度のアンケート調査のための事前調査を行う。

エスポー市の小学校、中学校、高等学校、職業学校、アールト大学教職課程などの視察を計画している。